

編集後記

▼『現代宗教研究』第五十五号をお届けします。

▼第五十三回中央教化研究会議では、令和二年（二〇二〇）九月九日に「人口減少社会における寺院の在り方とその可能性」というテーマで開催しました。しかし新型コロナウイルス蔓延のため、参加者を募らず、講演者・所員のみでリモート（Zoom）を用いて開催しました。

現宗研では中條曉仁師（現代宗教研究所嘱託・静岡大学教育学部准教授）と共に平成三十年度に広島県三次市・庄原市、令和元年度に山梨県早川町における人口減少（過疎）と寺院とその存続問題について調査を続けてまいりましたが、その調査結果を「現宗研調査にみえる過疎地域寺院の現状と檀信徒の対応」として基調報告して頂きました。また井出悦郎氏（一般社団法人お寺の未来代表理事）による「ミレニウムの時代における寺院のあり方を考える」と題した基調講演を頂きました。その後、両先生とさらに広島三次市より田野岡亨悦師、山梨県早川町より山本是温師を加え、当研究所嘱託、灘上智生師の進行によりシンポジウムを開催しました。詳細は誌面をご覧ください。

▼令和元年度第二十九回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーでは、「教科書に見る日蓮聖人とは」日蓮

宗の未来を考える」をテーマに開催しました。学校教育書が青少年に与える影響は大きく、それ故にその記述によって引き起こされる問題も時には外交問題にまで発展する場合があります。本宗においても宗祖の取り扱いについて過去に何度か問題化されてきた経緯があります。そこで日蓮聖人が従来、どのように紹介されてきたか、鎌倉時代には「法華経」がどのように認識されていたか、宗教自体がどのように受け止められてきたか、歴史的経緯を辿る意味で東京大学大学院教授袁輪暉量師による「鎌倉時代の法華経観」、東京大学大学院准教授高橋典幸氏による「鎌倉幕府と宗教」、日蓮宗勸学院副院長・立正大学名誉教授中尾堯文師による「教科書における鎌倉仏教論」、参議院議員・早稲田大学客員教授大塚耕平氏による「私からみた日蓮聖人」というそれぞれの講題により四人の方から講演を頂きました。

▼小高絢子（絢華）師の論文は宗教社会学的見地から柴又帝釈天題経寺を事例として「仏教の文化資源化」というテーマで考察したものです。ご一読ください。

▼研究ノートは例年通り、研究員それぞれの研究成果を収録しています。現宗研の研究例会で発表されたものとなりますが、各研究員がどのような課題をもって調査研究に取り組んでいるのかを知って頂ければ幸いです。